

戦後サッカー雑誌のメディア的機能
—読者共同体の変容と教養文化との近接—
The Media-function of Soccer Magazines in Post-war
-Transformation of Reader' Community and Relating to Cultivatism-

佐藤彰宣
Akinobu SATO

立命館大学大学院社会学研究科 院生

要旨…本研究は、メディア論の視座から戦後のサッカー雑誌の「メディアとしての機能」を明らかにしたものである。日本で初めてサッカー雑誌が創刊された1960年代、サッカー雑誌は教養文化との近接性の下で知的なサッカー像を説く啓蒙メディアとして機能を有していた。70年代に入ると、サッカー雑誌を介して、共感の次元で結び付ける疑似的な読者共同体が形成された。また、同時代のテレビでのサッカー番組の受容のあり方は、雑誌によって規定されるという点が見て取れた。
キーワード スポーツ雑誌史、メディア論、雑誌の機能、教養文化

1. はじめに

(1) 研究の目的、分析対象

戦後日本において、スポーツ・メディアといえ、すぐにテレビが想起されよう。街頭テレビでの力道山や、メディア・イベントとしての東京オリンピック、ゴールデンタイムに放送されるプロ野球などのように、戦後のスポーツ・シーンにはいつもテレビが付随していたといえよう。

だが、実はスポーツ雑誌も全盛期にあった。『出版指標年報』での「スポーツ雑誌」全体（月刊誌）の推定発行部数を見ると、1960年度の700万部から1970年度1,666万部、1980年度4,269万部と年を追うごとに増加している¹。その意味で、スポーツ雑誌はテレビに取って代わられたというよりも、テレビとともに共存していた。だとすれば、スポーツ雑誌は、放送メディアとは異なる、雑誌独自の「メディアとしての機能」（以下メディア的機能）を有していたのではないだろうか。言い換えれば、戦後日本社会において、なぜ「雑誌でスポーツを読む」という受容のあり方が成立していたのだろうか。

こうした問題意識に立脚し、本研究は戦後日本におけるサッカー雑誌のメディア的機能の解明を目指したものである。活字メディアとしては、雑誌のみならず、新聞や書籍もある。ただそうした中で、本研究が雑誌というメディアに着目する理由は、雑誌メディアに設けられている読者欄の存在と、定期的な刊行形態にある。特定の趣味を持つ読者同士が読者欄で、定期的に意見を交わす。そうした特性ゆえに、読者による疑似的なコミュニティが形成し得る基盤が、雑誌というメディアにあると考えられる。そこには、まさに放送メディアでは見えてこないスポーツの受容のあり様が存在するのではないだろうか。その意味で、本研究はスポーツ雑誌から戦後のスポーツ受容過程を捉え直す。

本研究では、戦後創刊されたサッカー雑誌として『サッカーマガジン』（ベースボールマガジン社、1966年創刊）と『イレブン』（日本スポーツ出版社、1971年創刊）を取り上げ、1970年代までの号を分析対象とする。サッカー雑誌を取り上げる理由としては、サッカーを取り巻くメディア環境においては雑誌が中心だった点にある。Jリーグが開幕する1993年以前は、サッカーは「マイナースポーツ」として認識されていた。特に1970年代までサッカーは、新聞での扱いは小さく、テレビでの放送も限られており、愛好者にとっての主な情報源は雑誌であった。いわば「サッカーを雑誌で読む」ことが前提とした受容のあり様が、そこには存在していたのである。それゆえに、雑誌のメディア的機能がより顕著に見て取れるのではないかと考える。

(2) 先行研究との差異、研究方法

本研究と関連する先行研究は、主に表象研究、メディア・スポーツ研究、雑誌研究の3種類に大別できる。

まず表象研究としては、カルチュラル・スタディーズの視座の下でスポーツテキストにナショナリズムや人種、ジェンダー

などの問題系を読み込む表象分析を行った阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑—身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』（2008年）や有元健・小笠原博毅編『サッカーの詩学と政治学』（2005年）などが挙げられる。それらの表象研究において、鋭く指摘されるスポーツとメディアの関係に潜むポリティクスは、非常に示唆深い。ただその一方で、テキスト内容の内面的な分析に関心が寄せられるあまり、テレビ、映画、新聞などのメディアが一様に扱われており、スポーツ受容に媒体自体がどのように影響しているのかという点については必ずしも明確にされていない。

また放送や新聞などとスポーツの結びつきを批判的に問うメディア・スポーツ研究としては、有山輝雄『甲子園野球と日本人—メディアのつくったイベント』（1997年）や清水論『甲子園野球のアルケオロジー』（1998年）、黒田勇『ラジオ体操の誕生』（1999年）などが挙げられる。それらの研究では、特に新聞や放送メディアに関心が置かれる一方で、雑誌は分析対象として関心が払われてこなかった。先述したように、放送メディアとは異なる雑誌独自のメディア的機能を問わなければ、雑誌がテレビとともに共存していた戦後のスポーツ受容のあり様は見えてこないのではないかと。

一方で、メディア史としての雑誌研究では、長嶺重敏『雑誌と読者の近代』（1997年）や佐藤卓己『キングの時代』（2002年）、阪本博志『平凡の時代』（2008年）など、特定の時代における雑誌メディアの社会的な機能を考察するものがある。本研究は、そのメディア論（史）の視座を、これまでほとんど顧みられなかったスポーツ雑誌に援用しようとするものである。

つまり、媒体自体の特性や機能を特定の歴史・社会的な文脈の下で検討するメディア論の視座から、スポーツ雑誌（今回はサッカー雑誌）を通時的に分析することで、戦後日本のスポーツ受容におけるメディアの力学を解き明かしたい。

2. 啓蒙メディアとしてのサッカー雑誌

日本で初のサッカー専門誌、『サッカーマガジン』は1966年に創刊された。1960年代、日本は一時的な「サッカーブーム」に沸いていた²。1964年の東京五輪、1968年のメキシコ五輪での日本代表の活躍や1965年の日本リーグの開幕で、サッカーへの社会的な関心が高まる中で、ベースボール・マガジン社は「サッカー時代きたる」としてサッカー専門誌の創刊に踏み切った³。

『サッカーマガジン』のプレ創刊号となった『スポーツマガジン』1966年3月号の目次を眺めると、石原慎太郎と当時の蹴球協会会長野津謙による「対談—日本サッカーのビジョン」をはじめ、岡野俊一郎・長沼健・小野晃爾・竹腰重丸・響田三男といった蹴球協会関係者による「座談会—日本サッカーの技術水準は、どこまで向上したか」、岡野俊一郎「第45回天皇杯全日本選手権大会総評」、村岡博人「名著『サッカー』を読んで」、新田純興「世界の名選手」などが並んでいる。

ここで着目すべきは、彼ら執筆者の経歴で、当時の蹴球協会のトップ陣営がほぼ勢揃いしている点だ。これら協会関係者を中心とし、新聞記者が加わり、誌面は構成されている。そして興味深いことに、野津、竹腰、新田、岡野が東大（帝大）出身で、響田、小野、工藤が早稲田出身というように彼らの多くが、大正から昭和にかけて旧制中学でサッカーに出会い⁴、その後、東大や早大のサッカー部を中心に活躍した学歴エリートなのだ。

初期の『サッカーマガジン』では協会関係者を「日本サッカー界の権威者」と位置付け⁵、彼らを中心とした対談や座談会などの討論企画を頻繁に掲載していた。そこでは、こうした学歴エリートが、「サッカー・ブーム」下でまだ興味を持ち始めて間もない一般の読者に対し、サッカーがどのようなスポーツかを教え説く構図が見て取れる。その意味で、初期のサッカー雑誌は啓蒙メディアとしての機能を有しており、誌上ではサッカー論壇のような言説空間が形成されていたのだ。

3. 知的サッカー言説と教養文化

初期のサッカー雑誌上に形成された論壇において、とりわけ大きな存在感を放っていたのが岡野俊一郎である。岡野は、1960年代において日本蹴球協会技術委員や日本代表コーチなどを歴任する傍らで、サッカー雑誌上では論評を寄稿したり座談会へ参加するだけでなく、該博な知識と留学経験を生かしてサッカー関連の洋書の翻訳記事まで連載していた。実際、『サッカーマガジン』の創刊号となる1966年6月号から1969年12月号までの間の計43号の内、誌面に岡野の名が登場しないのは、1966年10月号・1967年2・4月号・1969年4月号のわずか4回のみである。

岡野は、雑誌上にてサッカーを「知的なスポーツ」として紹介した⁶。特徴的なのは、そうした語りの延長線上で読書の規範を説く点にあった。『サッカーマガジン』において書評を担当した際に、岡野はある書籍を取り上げ、「千ページを越す大著だけに、読み通す決心が必要である。選手、コーチともにサッカーの上達を願う者であれば、この本を読み通すくらいの努力があるのは当然だと信じているが」と述べている⁷。また、自身が翻訳を担当した洋書のあとがきには、「本を読み、考え、勉強することは“thinking player”になるためにたいせつなことである」とも綴っている⁸。

一見すると、無関係に見えるスポーツと読書がなぜ結びつきたのだろうか。こうした岡野の言説の背景には、教養主義文

化の存在が窺える。教養主義とは、竹内洋によると「読書を通じ人格形成を図る態度」で1970年代当初までは大学キャンパスの規範文化であったという⁹。岡野のライフコースを辿ると、学生時代、教養主義のバイブルだった阿部次郎『三太郎の日記』を発売日当日、書店に深夜並んでまで購入するなど、教養主義文化に浸っていた様子が見て取れる¹⁰。その後、1949年に学制改革で新制となった東京大学理科2類に入学するも、理系の空気に馴染めず、文学部に転科している¹¹。教養主義文化の震源地であった東大文学部に籍を置いていた岡野にとって、読書とスポーツは親和性を持つものであった。

1960年代におけるサッカー雑誌に掲載された知的サッカー言説は、教養文化との近接のなかで学歴エリートによって紡がれていた。

4. 雑誌を介した疑似的な読者コミュニティの形成

だが、「サッカーブーム」は長く続かなかった。1970年代に入ると、サッカー日本代表の不振や日本リーグの観客数の低下などを受け、新聞上では「正直のところ、今の日本サッカーの層はきわめて薄く弱い」、「サッカーブームは下火になりつつある。ブームは虚像だったのかと思えるほどだ」と「サッカー熱のさめ具合」が叫ばれている¹²。

そうした時代状況にあって、サッカー雑誌の読者であるサッカー愛好者は、日本におけるサッカーの位置づけが「マイナースポーツ」であることに非常に自覚的であった。1970年代当時のサッカー雑誌の読者欄には、以下のような読者の声が載せられている。

サッカーといえば、地上最高のスポーツである。野球などとは違い、一人一人のプレーのパス、ドリブル、シュートで初めて得点につながる。チームワーク、紳士の国、英国で生まれた、ジェントルマンのスポーツ。それに、連盟に加盟している国が国際連合よりも多いということ。このことから、サッカーは世界のスポーツであるということがわかる。(中略) だが、わが国では、サッカーというものは影の存在に等しい。(中略) いくらぼくたちがサッカーを愛していても、こういう環境の中でサッカーをやるということは、ぼくにとって何かみじめだ¹³

スポーツ界におけるサッカーの正統性を主張しながらも、日本社会でサッカーを愛好する際に感じる「みじめさ」や野球へのコンプレックスがここからは読み取れる。読者欄の機能は、こうした一人の読者の鬱積した感情を公に提示し、その意見に対して翌月以降で応答されることで読者間での感情や意見の共有を可能とした点にある。この投書に対して、翌月号で別の読者から以下のような、励ましの返答がなされている。

義人君、サッカーをやっているなら堂々としなさい。サッカーほど愛されているスポーツは他にないではないか。日本では野球が盛んであるが、考えてみたまえ、サッカーと野球。野球は一球毎に、コーチ、監督がブロックサインを出す。あれでは選手は動くロボットである。その点サッカーはグラウンドに入れば、選手一人一人のインテリジェンス、イメージネーションを必要とする。また運動量もかなり必要とする。これだけ考えただけでもサッカーのすばらしさは計らずとも知っている。そのことを一番知っているのは君自身じゃないか。君がサッカーを愛しているなら、堂々とプレーしなさい¹⁴

サッカーブームが下火となり、サッカーが「影の存在」にある日本社会のなかで、このようにサッカー雑誌は「サッカーを愛する」者同士がサッカーファンとしてのアイデンティティを確認し合う場として機能していた。換言すれば、読者は、誌面の向こうに、「みじめ」な思いを抱えた同じの心境の読者＝サッカー愛好者を想像しながら雑誌を読んでいた。つまり、サッカー雑誌を媒介に、感情や意見を共有する疑似的な読者コミュニティが形成されていたのである。

加えて特筆すべきは、どちらの読者にも岡野らサッカー論壇での言説の影響が窺える点である。前者にある「連盟に加盟している国が国際連合よりも多い」それゆえに「サッカーは世界のスポーツである」というロジックは、岡野がかねてから頻繁に紹介しており、1968年に刊行された岡野の自著『サッカーのすすめ』では第一章の冒頭に「国連より大きな世界サッカー連盟」という記載がある¹⁵。後者の「インテリジェンス、イメージネーション」という語り草もまた岡野のサッカー語りの代名詞ともいえる言葉である。

その意味で、彼らはまさに、野球に比して「世界的」で「インテリジェンス」を要するスポーツという岡野らが唱えたサッカー観を内面化したサッカーファンであった。逆に言えば、岡野ら協会関係者のサッカー言説こそが、雑誌読者のサッカーファンに対して、サッカーを愛好する社会的な意味を提供していたのである。

5. 雑誌的テレビとしてのダイヤモンドサッカー

1970年代、サッカー雑誌上の読者欄において盛んに議論されたのが、テレビ番組「三菱ダイヤモンドサッカー」の放送拡大の要求である。

「三菱ダイヤモンドサッカー」とは、1968年に東京12チャンネルにて放送が開始されたテレビ番組である。「国際感覚が身につくようなスポーツ教養を日本の若い人たちに与えるのがメディアの役割ではないか」¹⁶という蹴球協会副会長で三菱化成社長だった篠島秀雄の提案によって、当時ほとんど唯一海外サッカーを伝える番組だった。解説者には、篠島の指名で東大サッカー部の後輩にだった岡野俊一郎が担当した。「インテリジェンスとかイマジネーションという言葉」を多用しながら、「世界各地のサッカークラブの存在価値や意義、さらにはその文化的背景までも解説」する岡野の語りには、当時の視聴者は「世界のことを教えてくれる教養番組」や「だんだんサッカーのほうが野球よりも上等なもののように思えてきた」という感想を抱いたという¹⁷。

そして「ダイヤモンドサッカー」について注目すべきは、その特殊な放送形態にある。同番組はワールドカップなどの放送テープを後から購入するため、現地での試合開催から何カ月も遅れたでディレイ放送を前提としていた。さらに放送時間の関係から、90分の1試合を前半と後半の2週に分けて放送していたのである。よって、サッカー雑誌の方が先に試合の情報を伝えることになる。つまり、情報の速報性の点で、相対的にはテレビよりも雑誌が先行するという特異なメディア状況が成立していたのである。

雑誌の面からみると、『サッカーマガジン』では「ダイヤモンドサッカー」の特設欄が設けられていた。「ダイヤモンドサッカー」に関する欄では、その月の放送予定と合わせて、その試合の結果や出場メンバー、詳しい試合の経過、決勝点のシーンの写真などの詳細な内容までも記載されていた。現在はサッカージャーナリストである武智幸徳は、当時の様子を振り返って以下のように述べている。

『サッカー・マガジン』にしても、今はなくなってしまった『イレブン』にしても、当時はワールドカップが終わるとすぐに特集号を発売していました。だから、何対何でどちらが勝ったとか、何分ごろに点が入ったという結果はだいたい把握していたんですが、それでも試合はめっちゃ面白かったですね。雑誌を読んで、“ここでクライフが凄いゴールを決める”とわかっているだけに、妄想が膨らんでいるんですよ。実際に『ダイヤモンドサッカー』でそれを追認していくという作業が延々と1年ほど続いたのですが、僕らサッカーファンは幸せでしたね¹⁸

このようにサッカーファンは事前に雑誌で「予習」し、テレビ放送では既に内容と結果を知っている映像について「追認」しながら、岡野の「知的な」解説を受容した。つまりサッカーファンは「ダイヤモンドサッカー」を「読む」ように「見る」のであり、その意味で「ダイヤモンドサッカー」は“雑誌的なテレビ”であった。当時、よりよく「見る」ためには「読む」ことが欠かせないという雑誌を前提にしたメディア編成が成立していた。

だが「ダイヤモンドサッカー」には、その放送が東京12チャンネルという関東地方のローカル放送局だったがゆえに、視聴については地域的な偏差が生じていた問題が付きまとっていた。それゆえに、読者欄では以下のように「ダイヤモンドサッカー」の放送の拡大を求める声が多く寄せられていた。

サッカー狂ならだれでも「一度は見たい」と思うのがワールドカップだ。東京地方の人はその生々しい迫力を目で見ることができる。しかし、九州や四国、北海道、その他の地方では見るできない。(中略)この「イレブン」を通じてよびかける「ワールドカップの放送を地方にも！」¹⁹

このハーフ・タイムの欄に「もっとサッカーの放送を」という意見が出ているのをよく見ますが、全く同感です。僕としてはムルデカ(大会)も見ることがないし、まして大学リーグなどは大学野球は放送されるというのに…せめてダイヤモンド・サッカーでも、と思うのは僕一人ではないでしょう。このことは地元の放送局に頼むべきことも知れませんが、しかし、ぜひ東京12チャンネルおよびサッカーマガジン諸氏にもご尽力願いたいのです。まことに勝手ながら…²⁰

こうした読者の声からは、地方に住むサッカーファンにとっては、「雑誌でサッカーを読む」しかなかったメディア状況が

浮かび上がってくる。裏を返せば、地方のサッカーファンにとってサッカー雑誌は「ダイヤモンドサッカー」の代替する機能も担っていたともいえよう。「海外サッカー」の情報や岡野のサッカー論は、テレビだけでなく、雑誌を通して「読む」ことで得られた。

だが、なぜ読者であるサッカーファンは、放送局に直接陳情するのではなく、雑誌を通して間接的に呼び掛けたのであろうか。そこには、サッカー雑誌がテレビ局や蹴球協会との連携を盛んに示していたという背景がある。実は先述したような「ダイヤモンドサッカー」の放送拡大を求める読者の声に呼応する形で、雑誌側も全国の放送局の住所を掲載し、「ハガキ一枚でワールドカップ決勝を見よう」と「全国で中継実現の大運動」を呼びかけていた²。並びに雑誌上では、「ダイヤモンドサッカー」を担当する東京12チャンネルの制作者の声を載せるなど逐一放送局の動向を報じることで、テレビ局との結びつきを読者に示していた。さらにいうと、先述したように初期のサッカー雑誌における論者の大半が蹴球協会の関係者であった。特に蹴球協会の役員でもあり、また「ダイヤモンドサッカー」の解説者でもあった岡野俊一郎は、雑誌上の自身の連載コラムなどで「ダイヤモンドサッカー」について言及したり²、読者からの投書を紹介するなど²、雑誌と日本蹴球協会、そして「ダイヤモンドサッカー」との密な関係をアピールしていた。このように、三者の緊密な関係性が示されることで、雑誌への投書がテレビ局や蹴球協会への働きかけにもつながるのではないかというリアリティが醸成されえたのである。

6. おわりに

本稿では、1960年代から70年代におけるサッカー雑誌のメディア的機能を分析した。1960年代における創刊初期のサッカー雑誌は、教養文化と近接性をもった知的サッカー言説が提示される啓蒙メディアとしての機能を有していた。その後、「サッカーブーム」が下火になっていく過程で、サッカー雑誌の読者欄を媒介に、「マイナースポーツ」を愛する悩みを共有する疑似的な読者コミュニティが形成された。そうした読者欄で盛んに議論されていた「ダイヤモンドサッカー」は、雑誌がサッカー受容における主要メディアだったがゆえに、「読む」ように「見る」雑誌的テレビとしての特性を備えていた。

以上のような戦後におけるサッカー雑誌の機能とそれを取り巻くメディア編成は、現在のインターネットを介したスポーツファンのコミュニティのあり様や放送メディアのライブ中継を自明視したメディアを介したスポーツ受容のあり様を問い直すような視座を提供してくれるのではないだろうか。

補注

¹ 『出版指標年報 1963年版』全国出版協会出版科学研究所、49頁。『出版指標年報 1970年版』全国出版協会出版科学研究所、89頁。『出版指標年報 1985年版』全国出版協会出版科学研究所、238頁。

² 『朝日新聞』1966年6月30日朝刊。『読売新聞』1968年11月15日朝刊。

³ 『週刊スポーツ'66』1966年5月6日号74頁。

⁴ 旧制中学とサッカーの結びつきについては、福島寿男「大正期におけるサッカーの中学校の普及とその日本サッカー史への影響」（『体育史研究』第28号、2011年、45-54頁）に詳しい。福島によると、日本において野球が興隆した明治末から大正期において、学生が野球に熱中する余り、勉学をおろそかにすることが問題視されていた。そんな中で、この問題がより深刻だったのは進学校である中学校であった。野球害毒論が盛んに論じられる中で、広島一中や神戸一中、東京府立五中など進学校の校長は、当時日本と同盟関係にあったイギリスのパブリックスクールを模範とし、「反野球のエリートにふさわしい」「人格練成」のための「教育的な競技」としてサッカーを校技とした。

⁵ 『サッカーマガジン』1967年5月号42-43頁。

⁶ 『スポーツマガジン』1966年3月号、25頁。

⁷ 『サッカーマガジン』1967年6月号、92頁。

⁸ 岡野俊一郎「あとがき」アラン・ウエイド、岡野俊一郎訳『サッカー・ベスト・コーチーコーチのいない君のための』ベースボールマガジン社、1973年、220頁。

⁹ 竹内洋『教養主義の没落』中央公論社、2003年、40頁。

¹⁰ 岡野俊一郎『雲を抜けて、太陽へー世界へ飛躍する日本サッカーとともに』東京新聞出版部、2009年、41頁。

¹¹ 「私のサッカー人生 岡野俊一郎さんインタビュー」東大LB会・東京大学運動会ア式蹴球部『東京大学のサッカー、ライトブルーの青春譜—東京大学ア式蹴球部90年記念誌』東京大学LB会、2008年、40頁。

¹² 『朝日新聞』1971年10月5日朝刊。『朝日新聞』1977年1月31日朝刊。

¹³ 『イレブン』1974年11月号、158頁。

¹⁴ 『イレブン』1974年12月号、158頁。

¹⁵ 岡野俊一郎『サッカーのすすめ』講談社、1968年、10頁。

¹⁶ JDFA (ジャパン・ダイヤモンド・フットボール・アソシエーション) 編『「ダイヤモンドサッカー」の時代』エクスナレッジ、2008年、103頁。

¹⁷ 同上、326-346頁。

¹⁸ JDFA (ジャパン・ダイヤモンド・フットボール・アソシエーション) 編『「ダイヤモンドサッカー」の時代』エクスナレッジ、2008年、347頁。

¹⁹ 『イレブン』1971年7月号、102-104頁。

²⁰ 『サッカーマガジン』1972年11月号、197頁。

²¹ 『サッカーマガジン』1974年6月号、106頁。

²² 『イレブン』1974年7月号、134頁。

²³ 『サッカーマガジン』1974年12月号、98-102頁。

参考文献

【史料】

(雑誌・新聞・出版資料)

- 1) 『朝日新聞』朝日新聞社。
- 2) 『イレブン』日本スポーツ出版社。
- 3) 『文藝春秋』株式会社文藝春秋。
- 4) 『サッカーマガジン』ベースボール・マガジン社。
- 5) 『週刊スポーツ' 66』ベースボール・マガジン社。
- 6) 『出版指標年報』全国出版協会出版科学研究所。
- 7) 『スポーツマガジン』ベースボール・マガジン社。
- 8) 『読売新聞』読売新聞社。

(年史・著作・伝記等)

- 1) アラン・ウエイド(岡野俊一郎訳)『サッカー・ベスト・コーチーコーチのいない君のための』ベースボールマガジン社、1973年、220頁。
- 2) 岡野俊一郎『雲を抜けて、太陽へ—世界へ飛躍する日本サッカーとともに』東京新聞出版部、2009年。
- 3) 岡野俊一郎『サッカーのすすめ』講談社、1968年。
- 4) 日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』講談社、1974年。
- 5) 財団法人日本サッカー協会75年史編集委員会編『財団法人日本サッカー協会75年史』ベースボール・マガジン社、1996年。
- 6) JDFA (ジャパン・ダイヤモンド・フットボール・アソシエーション) 編『「ダイヤモンドサッカー」の時代』エクスナレッジ、2008年。
- 7) 東大LB会・東京大学運動会ア式蹴球部『東京大学のサッカー、ライトブルーの青春譜—東京大学ア式蹴球部90年記念誌』東京大学LB会、2008年。

【研究書・研究論文】

- 1) 阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑—身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社、2008年。
- 2) 有元健・小笠原博毅編『サッカーの詩学と政治学』人文書院、2005年。
- 3) 有山輝雄『甲子園野球と日本人—メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年。
- 4) 黒田勇『ラジオ体操の誕生』青弓社、1999年。
- 5) 阪本博志『平凡の時代』昭和堂、2008年。
- 6) 佐藤卓己『キングの時代』岩波書店、2002年。
- 7) 佐藤卓己『テレビ的教養—億総博知化への系譜』NIT出版、2008年。
- 8) 清水諭『甲子園野球のアルケオロジー』新評論、1998年。
- 9) 竹内洋『教養主義の没落』中央公論社、2003年。
- 10) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年。
- 11) 福島寿男「大正期におけるサッカーの中学校への普及とその日本サッカー史への影響」『体育史研究』第28号、2011年、45-54頁。
- 12) ロジャ・シャルチエ(長谷川輝夫訳)『書物の秩序』筑摩書房、1996年。